緑爽会会報　No. 194

2024年10月24日発行
日本山岳会　緑爽会
発行人　荒井正人

デザイン･制作　関塚貞亨

〜〜《報告》〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

《10 月山行報告》

赤ぼっこ　―ちょっと暑い秋晴れの長淵丘陵を歩く―

石塚 嘉一

実施日：2024 年 10 月 7 日（月）　参加者 6 名　（後掲写真参照）

恒例の秋の山行で、青梅の南方、多摩川を越えた日の出町との境に連なる長淵丘陵を歩いて、赤ぼっこに行くことになった。今年の夏は、異常な猛暑で、企画をしたころはとても遠出をする気が起こらず、赤ぼっこという名前も気に入っていたので、近場で手を打ったというわけであった。それもあってか､参加はいつもよりはるかに少ない 6 人であった。

青梅線の宮ノ平駅から、その前を通る青梅街道をしばらく日向和田の方に歩く。街道の右側に、和田乃神社、続いて明白院（めいばくいん）が建つ。明白院は永禄 10（1567）年開創の福禄寿を祀る青梅七福神の一つで、緑爽会でも 2016 年新年の七福神巡りで訪れたと会報（No. 142）にある。

その先の信号のところで青梅街道から左に下ると、多摩川に架かる和田橋を渡る。清流が美しい。上流の方には日向和田駅から吉野梅郷へ渡る神代橋がよく見える。両側が住宅の坂道を上るとすぐに吉野街道に出る。吉野街道沿いの梅ケ谷（うめがた）峠入口の信号で左折、梅の公園への自動車道を上り、すぐのところにある道標でさらに左への林道に入る。道標には、天狗岩自然歩道とあり、天狗岩には 2.8km、馬引沢（うまひきさわ）峠には 3.7km とある。

竹林を右に見て並木入林道を進むと薄暗い林の中から登山道が始まる。人影のない住宅が 2 軒あるが、犬が吠えたので飼っている人がいるのだろう。駅からここまでで 40 分ほど。前日までの雨で、山道は濡れていて、ところどころですべる。この日は、久しぶりの秋晴れになったが、夏日が戻って暑さで汗が流れる。

目　次

ページ

《報告》

1. 赤ぼっこ　―ちょっと暑い秋晴れの長淵丘陵を歩く　石塚嘉一

3. 秋の山行　「赤ぼっこハイキング」　岡 義雄

《寄稿・投稿》

4. ウェストンのこと　夏原 寿一

6. 山岳会設立の頃〈20 世紀初頭の東京〉(最終回) ⓬　ABC 順の山岳会会員名簿　南川 金一

7. 緑爽会に入会しました　新入会員 小部 正治

《予告など》

7. 11 月山行：晩秋の奥多摩で紅葉を愛でる
12 月忘年会
1 月山行（新年山行）
会員異動
編集後記

リーダーのあとを岡さん、島田さんが続く。陽の入らない沢の横の道を行く。せせらぎの音が聞こえる。かなり急な道を登る。みんなの脚を考えて、30 分ごとに一本立てる。登山口から 30 分ほどで、天狗岩 1.9km の道標まで上がった。立派な道標が 100m ごとに立ててあり、道も整備されて

いる。きつい登りの尾根をさらに 15 分ほど登ると梅ケ谷峠と天狗岩への分岐に着いた。右、梅ケ谷峠へは、道が崩壊していて（行止り）と道標にある。天狗岩へは左に行く。休憩後、T シャツだけになって、また急坂を登ると 15 分ほどで尾根上に出る。尾根道の端に「要害山山頂 414 M」 の道標が立っているが、山頂らしくない。展望もないので先を急ぐと、急で狭くて長い階段があるのでそれを避けて山道の方を行くと、こちらも急で滑りそうになるし苦労して何とか下りられた。健脚の小林さんと荒井さんは階段の方を下りて、こちらの方が楽だよ、と言う。その後も、これほどではないが、アップダウンが何度もあって、そのたびに、緩くても下りはなかなか苦労した。

右側がヒノキ林、左側が広葉樹の自然林の中を、緩やかな道や、木の根が出た坂道を登っていくと天狗岩への分岐に出た。梅ケ谷峠の分岐から約 1 時間かかった。天狗岩のビューポイントまでは 0.2km だが、大きな岩を昇り降りしなければならないので、ここは割愛して、入口の前の平地で休憩。ツリバナの赤い実が何カ所もあるのを見つけて、島田さんや富澤さんがスマホで調べている。

天狗岩入口から 10 分ほどでついに赤ぼっこ（409.6m）に着いた。山名の由来の書かれた表示板があり、赤ぼっこの標識の立つ頂上には三等三角点がある。

頂上は広々してベンチもあり、北側の斜面が広く伐採され、桜やツツジが植えられていて、青梅市街が一望できる。西と北の方遠くには馬頭刈山、大岳山、御岳山、日の出山、川苔山、高水三山など、奥多摩の山々が、近くには青梅丘陵も見えるが、大まかな同定しかできない。暑い陽ざしを受けてここでゆっくりと昼食のあと、セルフタイマーで記念写真を撮って、今日の目的を果たしたので、帰途につく。

赤ぼっこ頂上で（左から）小林敏博、石塚嘉一、富澤克禮、岡義雄、島田稔、荒井正人

下山は、緩やかな道をゆっくりと馬引沢峠を目指して下る。要害山あたりから、登山道の脇にところどころ「日の出アルプス」と記した小さな杭が立っていたのが気になったが、日の出山から続くトレイルに付けられた名前らしい。20 分ほど下ると馬引沢峠に出る。戦国時代の鎌倉街道の要所で、鎌倉武士の畠山重忠が秩父と鎌倉の往還に通った所だ。

一瞬そういうことに思いを馳せながら、次のポイント旧二ツ塚峠へ急ぐ。右側に日の出町のごみ処理場をフェンス越しに見ながら、展望がない道を 20 分ほど行くと、ベンチのあるちょっと高くなった平地に突き当たる。何百年も前に峠の麓に住んでいた貧しい母と娘が一緒にここに生き埋めになったのを村の人が塚を二つ建てて供養したので、二ツ塚というのだと、悲しい伝説のことが立て札に書いてあった。ここで最後の休憩をとって、かなり広い山道をゴールの天祖山まで下る。

30 分ほど下ったところで道標に、真っ直ぐ行くと釜の淵公園、右は天祖神社とあるので、右の「長淵山ハイキングコース」と書いてある天祖神社への道をとる。大きな霊園の道路に一旦下りて、また山の道に入る。さらに黙々ときれいな山道を急いで下ると立派な天祖神社の屋根が見えた。

新しく入会された岡さんは、脚の具合がよくないと言っておられたのに、山のベテランらしく、時には先頭を歩かれ、島田さんや、足を痛めている荒井さんも含め、みんな無事に、ほとんどコースタイム通りに 5 時間で歩き通すことができて、互いに「健脚ぶり」を称え合った。打ち上げは、青梅駅前のおでん・焼き鳥の店「銀嶺」で。酒場詩人の吉田類の古びたポスターが貼ってあった。

（写真撮影、次項とも：石塚嘉一）

行程：青梅線宮ノ平駅 9:30→和田橋→梅ケ谷峠入口 10：10 →11：00 梅ケ谷峠・天狗岩分岐→要害山→天狗岩への分岐→12:20 赤ぼっこ（昼食）13:00 →13：30 馬引沢峠→旧二ツ塚峠 14:00→15:20 天祖神社→16:00 青梅駅、歩行時間約 5 時間

秋の山行　「赤ぼっこハイキング」

岡 義雄

この春、緑爽会に入会して初めての山行として、青梅市と日の出町の境界にある長淵丘陵の「赤ぼっこハイキング」に参加させていただきました。この山は高尾山より低いですが、小さな登り下りや赤土で滑りやすい所が多く、沢山の持病を抱える後期高齢者にはちょっときつく感ずるところもありましたが、予定時間を十分にとっていただいたお陰で、急ぐこともなくのんびりと楽しい山行となりました。

東京多摩支部が設定した「多摩百山」の中で、登頂した山は今回の赤ぼっこが 74 個目となりました。残りを全部登りたい気持ちはありますが、それは無理としても年齢、体力、体調を考えると、この周辺の山々はこれからも頻繁に訪れることになりそうです。

和田橋から久々に見る多摩川の雄大な渓谷の姿は、記録的な猛暑続きのために空調の効いた部屋で、戦争、災害、犯罪ばかりのＴＶニュースに毒された憂鬱な気持ちを払拭し、心の底から癒してくれました。長い猛暑で勢いを増した広葉樹の葉で鬱蒼とした樹林帯を各自の体調に合ったペースで、自然の中に居る喜びをかみしめながら黙々と登ります。稜線では、愛宕山、天狗岩には立ち寄らず、また南面の見晴らしの良いはずの所も、背丈以上の雑草に遮られ、日の出町方面の展望は得られませんでした。

それでも赤ぼっこの山頂は、樹木が伐採されていて、北側半分の、東面は青梅市街地や遠く狭山地域まで、西面は多摩川沿いの沢井方面や吉野梅郷から日の出山に続く山々が一望できました。

山頂の説明板によれば、1923 年の関東大震災で、この辺りの表土が崩れ、赤土が露出したので赤ぼっこと言われるようになったとのこと。丁度 1 年前に人工股関節の手術を受け、その 3 か月ごとの検診時に、主治医から「絶対に転ばないこと、転んだら手術のやり直し！」と言われていたので、この滑りやすい赤土の箇所では、慎重に歩いたため、皆さんの足を引っ張ることになってしまいましたが、そんな要注意箇所では先導していただくなどのお陰で、ハイキング最終地点の天祖神社には、あまり予定より遅くならずに無事到着できました。

ツリバナをスマホで調べる島田さんと岡さん（中央）。右は荒井さん

下山後は、恒例の懇親会を青梅駅近くの居酒屋で行い、思い出に残る初参加の記念山行になりました。今後もよろしくお願い致します。

～～《寄稿/投稿》～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

ウェストンのこと

夏原 寿一

会報『山』No.906（2020年11月号）に「英国山岳会に寄贈した五百城文哉の掛け軸の行方」と題した記事が掲載されている。執筆されたのは平林克敏・元副会長。要旨は、日本山岳会が上記の掛け軸を英国山岳会に寄贈するためにウェストンに託したのだが、英国山岳会に収蔵されておらず行方不明になっている、というものである。平林さんはこの件について英国山岳会にまで出向いて調査されたとのことで、記事を次のように結んでおられる。

> 現物はウェストンが私蔵したまま行方不明となり、英国山岳会には保管されておらず今日に至っています。……。
> 英国山岳会は、他国から贈られた資料など寄贈品については特に厳格に管理する伝統がありますから、この高山植物の掛け軸が記録にさえ残っていないことは、不思議としか言いようがありません。JACの皆さんが思うほど、ウェストンは信用に値する人物ではないという想いが重なります。この点については武田久吉氏（博物学者）と意を共有するものですが、この掛け軸に関しても、いつかどこかで突然姿を現わすというのが世の常、今回もそうあってほしいと願うばかりです。

ここには、平林さんが以前からお持ちだったウェストンに対する不信感と、行方の分からなくなっている五百城の掛け軸が出てくることを強く望んでおられるお気持ちが綴られている。

尚、五百城作品の行方不明については関塚貞亨さんも書いておられる（『山岳』2005/Vol.100 図書紹介欄『晃嶺の百花譜―五百城文哉の植物画』)。

また、上掲の記事には「…武田久吉氏（博物学者）と意を共有…」とも書かれている。私はこれがどういうことなのか気になっていたのだが、先日、たまたま手に取った『現代登山全集 1』(東京創元社 1961年刊)にそれと思しき記述があった。

その中で武田は、ウェストンの著作『日本アルプスの登山と探検』について、この本の内容は、書名にある「登山」でもなければ「探検」でもないと次のように書いている。(原文のまま)

> その当時比較的人跡まれな日本アルプス地域の記事は、相当興味をもって読めもするし、いくぶんの参考とならないでもなかったが、その他の部分は、ただ一片の紀行文であるにすぎないものである。もっとも、日本アルプスの記録だとて、英国地理学協会員である著者が「探検」と題するには決してふさわしい書物ではなくて、私がはじめて白馬に登るにあたって参考したが、ほとんどなんら得るところはなく、失望すべき著者であるとしかおもわれなかった。

そして、

> 「ジャパニーズ・アルプス」を標題とするウェストン氏の著書をひもといても、それが自身の発案にもとづくわけではないことは推定できるが、だれの何によったかは明記してない。ただどうも、チェンバーレン氏の著書の何かからヒントを得たものらしくは、だれでも感ぜられることとおもわれる。

と書き、他所から引いてきたものを自分の発案のように書いていることを看破している。

そこで、ウェストンの地元・英国でのウェストンの人物像はどうなのか、英国山岳会の年報“アルパイン・ジャーナル”に掲載されているウェストンの追悼記事を読んでみた。記事は2人の会員が書いているが、そのうちのT.A.Rumbold という人が文中に「私がまだ若かったころ、私は

ウェストンのお陰で登山に目覚め、彼の初めてのガイドなしの山行に同行した」と書いているので、両人の仲がわかる。

さて、追悼文を読んでいると、掛け軸について次のような記述があった。

ウェストンは日本のすべてが好きだったが、とりわけ絵画を好み、夫妻で版画や掛け軸の素晴らしいコレクションを作っている。そのうちのひとつ、富士山の描かれた掛け軸をクラブに寄贈している。

この一文は、日本から英国に贈るべくウェストンに託した五百城の掛け軸が“私蔵”になっていることを示している。掛け軸はいま、どこに居るのだろう？

さらに追悼文を読んでいくと次のような記述もあった。

ウェストンが私たちに語ったところによると、日本の登山の父は空海だが、近代登山のパイオニアは間違いなくウォルター・ウェストンである。

これには驚きだ。私たち日本人は古くから山を信仰の対象として、山には畏敬の念や親しみを持って接してきた。その長い歴史の流れのなかに、例えば志賀重昂による『日本風景論』の上梓など幾つかの契機があって、山に登ることを楽しみとする近代登山が生まれてきたのだ。

一方ヨーロッパの人々は、山は悪魔や竜が住んでいる恐ろしい場所だと思いこんでいて、山には近寄らず、山に入るのは麓に住む狩人ぐらいのものだった。こうした山への既成概念が打ち破られたのは 18 世紀になってからのことである。その発端は、アルプスの美しさを称えた A.V.ハラ―の抒情詩『アルプス』や J.J.ルソーの自然への回帰を訴える文章であり、1786 年の M.G.パカールと J.バルマによるモンブラン初登頂であった。ここに突然、登山という行為が始まったのである。ウェストンが来日するわずか 100 年ほど前のことだ。

ここで、宣教師であるウェストンは日本の山岳信仰をどう捉えていたのか『日本山岳会百年史』(続編)の「日本山岳会設立前史」(ヴァレリー・R・ハミルトン)に書かれているウェストンの言を見てみよう。

尚、筆者のハミルトン女史はスターリング大学の卒業論文「明治の日本における登山の発展、西洋人の影響の到達から日本山岳会の創立まで」を作成するために 1992 年に来日し、日本山岳会を訪れた。論文は知日家の英国人の観察を通して日本山岳会の創立前後を検証している。

ウェストンは、集団で登る一般の信仰登山者のことを「信仰心にかこつけて楽しみを求める集団」と表現するなど、…、ウェストンは、彼らに対する敬意のなさを隠そうとはしていない。……。 ウェストンは信仰登山者の団体である講のあり方を分析して「東洋版アルパイン・クラブ」だと規定しているが、それは引率者がいること、会費制であること、…、信仰登山用の衣装や杖に神聖な文字を刻印してもらうこと、などが似ているだけだとしている。

拙稿を書き終えるいま、ウェストンの負の側面だけを拾い出してきたせいか何かスッキリしないものがある。だが、ウェストンが日本山岳会設立のきっかけを作ったのも事実だ。大切にしたい。

山岳会設立の頃〈20 世紀初頭の東京〉（最終回）⓬

ABC 順の山岳会会員名簿

南川 金一

山岳会が設立されて、最初の１年間で約 400 人の入会者があった。設立当初の山岳会がどのようなものであったのか、それを知りたくてその 400 人を調べてみることにした。図書館へ行くと書架に『明治人名辞典』（底本は明治 33 年発行の『日本現今人名辞典』）という厚い本があって、よい資料があったと喜んだのだが、手にしてみて面食らった。掲載順がイロハ順であり、目次がない。調べたい名前が載っていると思われる頁にたどり着くのは容易でない。姓名の最初の音の載る頁にたどり着いても、２音目もイロハ順である。「伊藤・伊東」という姓だけでも 18 頁もあって、名前の方もイロハ順である。イロハの 48 音の前後を頭の中ですぐに分かる人はいるのだろうか。その都度、「いろはに…えひもせす」を繰り返したから、能率が悪いばかりか、ストレスも半端ではない。ちょうど、パソコンを習い始めたところだったので、何回目か以降からはパソコンで「いろはに…」と打っておいて、プリントアウトしたものを持参するようにした。

山岳会最初の会員名簿である明治 40 年の名簿は入会順だった。その次の明治 41 年と、明治 42 年の名簿は残っていない。明治 43 年の名簿はイロハ順である。しばらくはイロハ順の名簿が続き、大正９年の名簿から ABC 順になった。会員番号制導入に伴うもので、この時代に ABC 順を採用した名簿は珍しい。電話帳は、当初は加入順（番号順）、その後はイロハ順になった。大学等の卒業生名簿は、当初は成績順と推測され、明治末頃からイロハ順となっている。

最初の ABC 順による会員名簿は『山岳』第十四年第二号に添付する形で、大正９年３月１日現在の 749 名を、最初に名誉会員４人を会員番号順に、次いで正会員を ABC 順で掲載した。会員それぞれの番号が決まって最初の名簿でもあった。この時点で、なぜ名簿を ABC 順としたのか、当時の『山岳』には説明の記事はない。また、その後、そのことを説明した記事も見当たらない。

この名簿から発起人の名前を拾い出してみて、その番号が、城１番、小島２番、高野３番、高頭４番、武田５番、梅沢６番、山川７番としたことが分かるのだが、何を基準にその番号に決めたのかについても、どこにも説明がない。百年史のための調査をしながら、いつも頭から離れないテーマだった。一般的に名前の順番はイロハ順、五十音順、年齢順が考えられる。しかし、発起人の７人については、そのどれにも当てはまらない。そのうちに、もう一つアルファベット順があることに気が付いた。城から山川まで７人の名前をアルファベットで書いてみて、その順番はアルファベット順であることが明らかになった。

その動機は何だったのか。説明がないのだから、推測する以外にない。最年長であり、重し役であった城を１番にしたい、また実質的に会設立の牽引役であった小島を２番にしたい（この時、城は韓国、小島は米国で、二人とも日本にはいない）、という思いがあったはずである。アルファベット順であればそのとおりになる。高頭は年齢・財政的貢献からすると３番としたいところで、高野と逆になる。幹事会での議論には高頭も参加していたはずだが、高頭はそんなことにこだわらなかった。最も若い河田は山川姓になったので７番となり、うまく収まった。山岳会の事務所が 1919（大正８）年 10 月武田久吉方に移され、その時に会員番号制が導入されたことは本稿❶で述べた。この改革の中心は武田久吉であり、それを補佐したのは梅沢親光だった。会員番号による会員管理に着想したのは、英国を経験してきた武田久吉と、合理的な考え方の梅沢親光の二人による英断だった。会員名簿を ABC 順としたのは、発起人の番号決定を ABC 順としたことが先にあって、そのこととの整合性を持たせるためだったのではないかと考えられる。

緑爽会に入会しました

小部 正治

私は珍しい姓で、「こべまさはる」です。中央線・四ツ谷駅前の弁護士約35名の法律事務所で弁護士をしており1953年生まれ71歳です。中大白門会国分寺支部でご一緒している近藤裕会員から日本山岳会へ勧誘を受け、オリエンテーションで緑爽会を知りました。最近、特に体力が衰え長時間歩けず、腰痛もあってスピードも遅くなり、従来の山仲間と登山することが出来なくなりました。自分の「身の丈」にあった山行や仲間と出会えないかと入会することにしました。よろしくお願いいたします。

富士山をバックに杓子山で

東京都立川市出身で、小学校から高尾山、陣馬山、御岳山などに遠足や家族で登りましたが、登山とは全く無縁のままでした。事務所の先輩弁護士から新宿区内に勤務する方々が参加する「新宿山の会」に誘われた時36歳（1989年）でした。白根三山、荒川三山・赤石岳、鹿島槍・五竜、飯豊連峰など、8人程のメンバーで楽しい山行でした。また、家族とも、大菩薩峠、西沢渓谷、乾徳山、白馬・大雪渓、涸沢・奥穂高岳、などに行きました。

1996年にBSで「百名山」を紹介する番組が契機で百名山ブームが始まり、既に登った山は25座前後とわかり、事務所の同僚たちと百名山をめざしました。飛行機や列車で現地に行き、レンタカーを飛ばして登山口の温泉で一泊、翌日山頂まで登ったらその翌日に登る山の麓の温泉まで私が運転するというパターンで二山ないし三山を連続して登って行きました。2004年9月に富士山に事務所の「山の会」のメンバー5名と登り「剣ヶ峰」で全員で記念撮影し百名山達成を祝いました。

事務所旅行の帰りに別れて利尻山に登頂、ウニ満載の丼（3000円）が最高でした。朝日連峰を縦走した避難小屋では、雪渓で冷やした缶ビールを4人で1万円（1本1000円）も飲みました。知床の瀬石温泉・熊の湯・ホテル地の涯の湯は開放的な露天風呂で温泉三昧でした。高天原小屋の露天風呂では子熊が対岸から見下ろしていたのに驚き思わずタオルで隠しました。大雪のために新穂高ロープウェイが動かず、山頂駅に一泊したことも懐かしい記憶です。

その後20年ほど事務所の「山の会」のメンバーとそれなりの山を登ってきました。コロナ禍になってからは一人で高尾、御岳、五日市の低山（約3時間行程）に登ってきました。体力・スピードが衰えましたが、これからも可能な限り、山行したいと考えています。改めて、よろしくお願いいたします。

～～**《予告など》**～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

11月山行:晩秋の奥多摩、高水山で紅葉を愛でます

日程:11月27日(水)　集合:9時　青梅線「軍畑」駅(立川発7:56で軍畑8:52着です)

行程:いまさら高水三山？と言われそうですが、なるべく時間のかからないコースを現在検討中で、三山は登りません。下山後は沢井駅近くの小澤酒造を訪問する予定です。

申込:11月23日までに、荒井あるいは石塚にお申込みください。

詳細は11月上旬にお知らせしますので、それをご覧いただき最終参加可否をご判断ください。

12 月忘年会
これまで、ルームの開いている第三土曜日に市ヶ谷で行ってきましたが、今回より日にち場所とも過去にとらわれずに開催することといたしました。ご了承の程、お願いいたします。
日時:12 月 14 日(土)12時～
場所:新宿の居酒屋を予定しています。(11 月中にお知らせします)
会費:4000 円(最近の物価高騰もあり、少し高くさせていただきます)
申込:12 月 8 日までに荒井にお申込みください。

1 月山行(新年山行)
恒例となった感のある都内の七福神や富士塚巡りですが、今回も小林のガイドにより、以下の日程で実施いたします。奮ってご参加ください。
日程:1月8日(水)
行程:都内七福神で検討中です。(これも 11 月中にお知らせします)
申込:1 月4日までに小林にお申し込みください。

会員異動
・新入会員
　小部正治(17222)

会報の送付方法についてご協力のお願い
ご存知の通り、この秋から郵便料金が上がりました。会の財政上に大きな影響があるまでの値上げではありませんが、メールを受信できる会員には、PDF 版を添付する方法を推奨したいと思います。現在郵送している会員で、メール添付のみに変更しても良いという場合は幹事にご一報をお願いいたします。

お知らせ:『孤高に生きた登山家　岡野金次郎評伝』が山と溪谷社より出版されました。以前、お孫さんにあたる渡邊貞信会員が会報に書いておられるように、渡邊さんも調査など様々な面で出版に協力をされました。この度、出版を受けて図書委員会では、著者の鈴木利英子氏などをお迎えして「山岳図書を語る夕べ」を開催することとなりました。(会報「山」10 月号で告知。申込方法はそちらをご覧ください)
日時・場所:12 月 11 日(水)18 時半～　ルーム 104 号室にて

--- 編集後記 ----------
先日の同好会連絡会議では、多くの会で高齢化、会員減少が課題という。緑爽会は 30 年目に入ったが会員数も維持できている。今後も山に行き、山を総合的・文化的に探究し続けて行きたい。(荒井正人)
長い、とても長い炎暑の時季がようやく終わったと思ったら北海道や東北では早くも初冠雪のニュースが。11 月の会山行は奥多摩、これまでとは違う短い秋を楽しみましょう。(小林敏博)
全国の里山や里地にいる身近な生きものが急速に数を減らしているという環境省の報告書が出た。チョウ類では 103 種のうち、広く見られる「普通種」の多くを含む 34 種が、絶滅危惧種と認定される基準の、年間減少率 3.5%以上を示した。気温の上昇が大きな要因の一つだといわれる。(石塚嘉一)
10 月初めころ目黒の自然教育園に行きました。都心にありながら大きな樹木が多数あり、園内の方の説明ではオオタカが子供を育てているとか。野鳥やチョウも飛んでいて、65 歳以上の方は無料ですので、秋の日を楽しまれたらいかがでしょう。(横関邦子)
次号予告＜12 月 25 日発行の主な内容＞皆様からの投稿をお待ちしています
　報告(安曇野山岳美術館、山行)、投稿・寄稿など